

## 岩野平三郎和紙関係資料について

### 岩野平三郎和紙関係資料

分類	件数	概要
書簡	約900件	小杉放庵（こすぎほうあん）（100通以上）、 富田溪仙（とみたけいせん）（60通以上）、 横山大観（よこやまたいかん）（80通以上） らと交わされたものなど
絵画類	約100件	提供された紙に、画家たちは礼として試筆し 作品を贈った。岩野の紙を愛用した小杉放庵 （12点）、横山大観（5点）らの絵が含まれる。
和紙関係資料	約150件	特許証や、感謝状、レプリカ類、和紙関係の 限定本書籍など

**寄贈者** 福井を代表する紙漉き職人のひとり、三代 岩野平三郎（いわのへいざぶろう）氏は生前より所蔵資料について寄贈のご意志を示されていた。

本年一月、お亡くなりになられたため、岩野氏とともにこれらの資料を守り続けておられた妹の岩野敬子（いわのけいこ）氏がその遺志を引き継いで県立美術館に寄贈していただくこととなった。

岩野敬子氏 昭和8年（1933）1月4日生まれ 満83歳。

越前市在住。三代岩野平三郎氏の実妹（2男5女の兄妹のなかで次女）

**資料の重要性** 岩野家は、日本画のほとんどが絹に描かれていた大正時代から、理想の紙を求める横山大観や小杉放庵などの日本画の巨匠たちの助言を受けながら、数々の日本画紙を誕生させ、現在までその技を守り育ててきた。

現在、日本画の90%以上が和紙に描かれるようになってきているが、残された資料からは大正から昭和初期の絵絹（えぎぬ）から和紙への画期的な変換があったことを具体的に知りえるものである。また初代から三代岩野平三郎氏と画家や学者たちの間で繰り広げられた交流を一望できるものである。

これまでに展覧会やマスコミでも部分的に取り上げられることがあったが、全貌については今回初めて明らかになるものであり、全体を俯瞰して研究することが可能になった。

**公開予定** テーマ展「新収蔵品展 絵絹（えぎぬ）から画紙（がし）へ

岩野平三郎和紙関係資料」

日 時：平成28年5月20日（金）～6月19日（日）

※午前9時から午後5時まで

※6月6日（月）は休館

料 金：一般・大学生100円（20名以上の団体は2割引）

※高校生以下、70歳以上、障害者手帳等をお持ちの方とその介助者  
1名は無料

会 場：福井県立美術館2階 常設展示室

# 主な絵画

★ 印のついている作品は会見場に展示してあります。

1 <sup>ヨヤマ タイカン</sup> 横山大観 <sup>チヨウヨウ</sup> 「朝陽」★

(大正11～昭和初期頃)



2 <sup>コスギホウアン</sup> 小杉放菴 <sup>シュウケイ</sup> 「秋溪」★

(大正末～昭和)



3 <sup>タケウチ セイホウ</sup> 竹内栖鳳 <sup>リュウゴウセイショ</sup> 「柳郷清暑」★

(大正末)



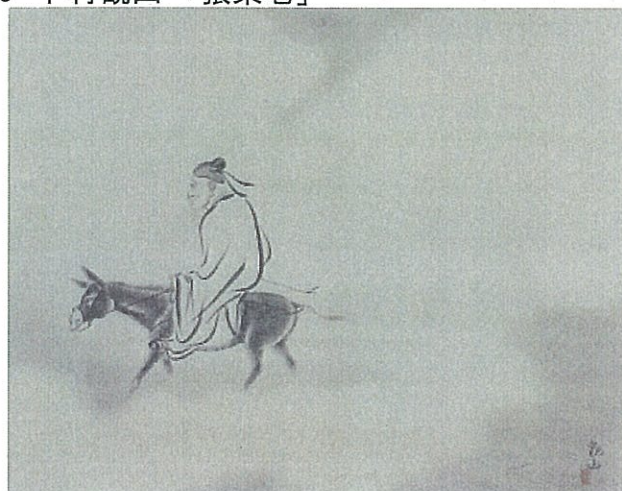
4 <sup>カワイ キョウドウ</sup> 川合玉堂 <sup>オンビョウフ エ</sup> 「御屏風絵」★

(昭和3年頃)



5 <sup>シモムラ カンザン</sup> 下村観山 <sup>チョウカ ロウ</sup> 「張果老」

(大正末～昭和)



6 <sup>ヨヤマタイカン</sup> 横山大観 <sup>シトウ</sup> 「初冬」

(大正末～昭和)



7 <sup>ヨヤマ タイカン ナス</sup> 横山大観 「茄子」 (大正末~昭和)



8 <sup>ヨヤマ タイカン ゲツメイ</sup> 横山大観 「月明」 (大正末~昭和)



9 <sup>トミタケイセン シンシモウシンのズ</sup> 富田溪仙 「獅子猛進の図」 (大正11)

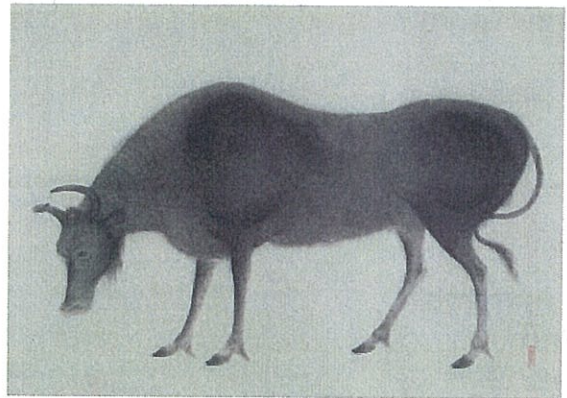


10 <sup>イシイ ハウテイ モクレン</sup> 石井柏亭 「木蓮」 (大正末~昭和)



11 <sup>コスギ ミ セイ ホウアン</sup> 小杉未醒 (放菴) 「老牛像」 (大正末)

※小杉放菴は初期に未醒と号し、別号に放庵もある。

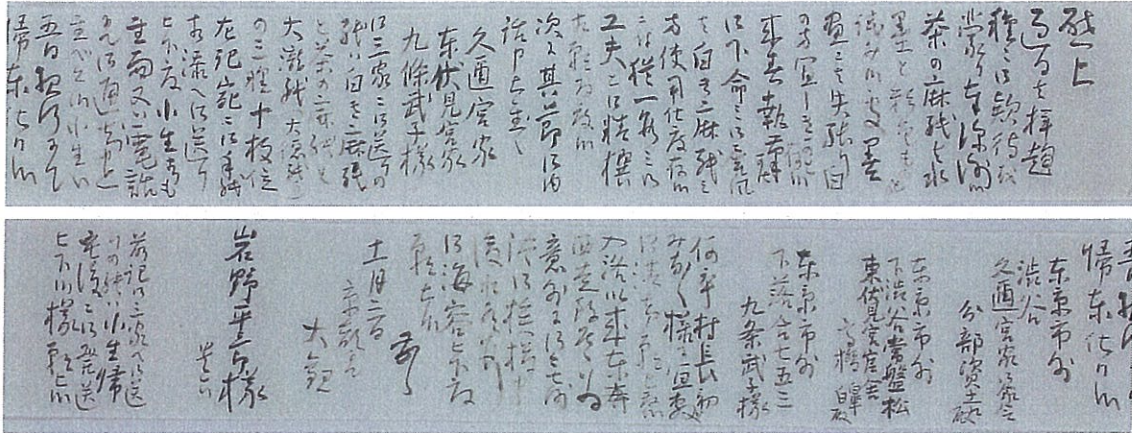


12 <sup>コスギ ホウアン シュケイ</sup> 小杉放菴 「珠雞」 (大正末~昭和)



## 主な書簡

13. 横山大観書簡（水墨画には白き麻紙を好む・久邇宮家、東伏見宮家、九条武子を紹介する）★

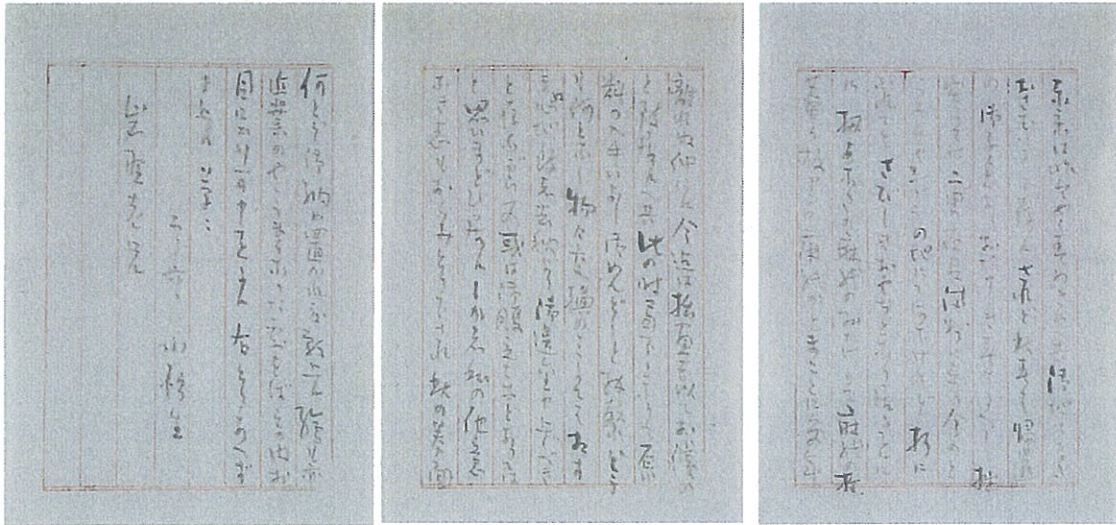


横山大観書簡（水墨画には白き麻紙を好む・久邇宮家、東伏見宮家、九条武子を紹介する）

発信日：十一月二日（※消印 大正十五・十一・二）  
 発信場所：京都  
 形状：巻紙・四紙  
 筆記用具：墨  
 法量：一八・三×二二・五  
 封筒：有

この手紙は横山大観が岩野平三郎に久邇宮家（くのにみやけ）、東伏見家、九条家に紹介の労をとったものである。大観は宮家や華族、実業家に紹介するなど、岩野の新製の日本画用紙の普及に熱心であった。昭和三年に昭和天皇の即位の大札にあたり悠紀・主基（ゆき・すき）の屏風が新しく調製され、その料紙の調製が岩野平三郎に下命があったのも、それまでの実績と横山大観の推薦があったものと考えられる。

14. 小杉放庵書簡（麻紙への謝辞「麻紙の放庵か放アンの麻紙」・麻紙の代価を物々交換のみにて相すまぬ心地）★



小杉放庵書簡（麻紙への謝辞「麻紙の放庵か放アンの麻紙」・麻紙の代価を物々交換のみにて相すまぬ心地）

発信日：二月六日（※昭和十六・三・七）  
 発信場所：東京田端 形状：用箋・三枚 筆記用具：墨 法量：（各）二四・八×一七・二  
 封筒：有

「麻紙の放庵か放アンの麻紙か」とまことに毎年離れぬ仲に」のくだりに、理想の紙を得た放庵の喜びが伝わってくる。小杉放庵は初代と二代の岩野平三郎に百通を超える手紙を送り、時には厳しく批評をして画紙を送り返すなど、紙にこだわった作家でもある。放庵が愛用した「麻紙」は、もとは奈良から平安の始めまで漉かれていたものであったが、楮や雁皮を原料とする紙にとって替られ、その技術も長く失われていたのを、初代岩野平三郎が試行の上に復興させたものである。放庵は麻紙のなかでも極薄のものを好み、そこに乾いた筆による味わい深い絵を描いた。二代岩野平三郎も画紙の技を継承し、その確かな技を認めたのは放庵だった。